

---

# 魔法先生ネギま! 哀川優織の躍動世界

774

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！　哀川優織の躍動世界

### 【Zコード】

N2813BA

### 【作者名】

774

### 【あらすじ】

少しずれた世界。

何で死んだのかは、解明する事は叶わない。

気付けばそこは裁判現場。被告人は「僕」で検察官は「神様」。

裁判を壊してしまつたら、どこかの川に出たり、すんごい美人にあ

つたり、自分の人生の根本を聞かされたり。

そして世界は角度を変えてずれていく。

ああすばらしきこの世界。

なんてくそつたれな世界なんでしょうか。

魔法なんて使おうともおもわない。

目的？復讐かもしれないし、違うかもしないな。  
のんびり出来るといいな、って。

まあ、そんなお話。

## 第一話（前書き）

プロローグと序章が完了するまで只管に予約投稿。

初回に限り昼0時ですが、以降は夕方6時。深夜0時に更新。序章はたぶん計7・8回。

合計、メモ帳にして約80kb

習作です。過度の更新は期待しませんよう。

また、小説情報から作者ページへ行つて、私のほかの駄作に手を伸ばすのはやめておいたほうがいい、と先に言つておきます。

では、挨拶はこれにて。

楽しく読んでいただければ幸いで御座います。

この小説は、著・赤松健「魔法先生ネギま！」、著・西尾維新「ネソギラジカル」並びに戯言シリーズ及び、「零崎人識の人間関係」並びに人間シリーズ、「化物語」シリーズなどの設定を拝借させていただきます。端的に言わせていただきますと、主軸として「魔法先生ネギま！」を、設定要素及び物語の若干の交錯要素として西尾維新氏作品と混ぜた、というものです。

そういうものがお嫌いな方、ブラウザバックをお勧めいたします。

また、この作品は習作として自分の出来る限りの表現を使って書かせていただいています。そのため、読者様からの文法のおかしなところや表現技法のへんなところなどの指摘を、お待ちしています。

では、長くなりましたが、お楽しみいただければ不精私目、感謝感

激の極みで御座こます。お楽しみいただかることを願つておつます。

## 第一話

ああ、僕は死んだんだな。

理解すること自体に、時間は必要なかつた。

唐突過ぎはしたが、覚えが無いわけではなかつた。

当たり前と言つては当たり前なんぢゃないだろうかと、そう思ひ。自分はそれだけのことをした。歴然とした自覚がある。

そもそも、そんなことをして、逆に自分がそうならないなんていう保証は無い。寧ろ、なる可能性の方が高い。因果応報というやつだ。だが、そうだからといって納得する気は毛一本、毛頭もない。

と、まあ少し話は変わるが、ヒトの「意識」というものは何に依存するものなのか、考えたことはあるだろうか？ 僕はある。しようちゅうだ。何か行き詰った時、現実が疲れた時、そんな時、哲学的というか、そういう事を考えると、意外と落ち着く。

つと、話が脱線した。

例えば、人間の意識は脳にあるとしよう。というか、この場合意識というよりは、「心」と言った方が適切かもしない。

医療技術の中に、「移植」というものがあるだろう。もし仮に、技術が進歩して「脳」の移植が可能になつたとする。でもさ、脳つて何が詰まつているんだい？ そこでさつきの例だ。脳の中にあるのは「心」だとする。脳味噌だとか、そういうのは今はおいておく事にしよう。

あるところに少年が一人いたとする。

平凡な日常を送っていた少年は、事故で全身麻痺。一度と動けず、

最低限、意思を伝える事しか出来ない。これはまあ、脳以外の死つてことだ。

またあるところに、少女が一人いたとする。……別に、少年でも良いけれど。

少女もこれまた事故に遭う。彼女は体は奇跡的に助かつたが、ショックで意思を伝える事もできなくなる。これはつまり、脳死。

それは何の因果か、運命の悪戯か。

その事故、同日に起きて、同じ緊急病院に運ばれる。

これまた不思議。二人を担当した医師は同じ人。

医師は考えた、そう、脳移植を。

世界は未来、技術はほぼ確立。

ならやることは一つしかない。医者の本分は、一人でも多く、助けられる命を助ける事。

手術は成功。晴れて、パートが半分ずつ足りなかつた二人の人間は足して二で割ることで、一人のヒトとして生きながらえた。

さて、そこで問題だ。その場合、意識はどちらにある？

当然、少年の方。

なんてつたつて、「心」は脳に宿るんだから。

じゃあさ、少女の「心」は何処にいったの？

と、どうでもいい例えはここまでにして、本題の本題だ。

行き場を失つた「心」……まあ、また言い換えて有体に言えば、「魂」つてところか。

本来、宿るはずだつた場所を追いやられた「魂」は何処へか。

それは正しく、神のみぞ、知るつづーわけだ。

要は、脳の死とヒトの魂の指向性と関係性のことを説いてるわけ。

そして、そんな僕は脳死判定のかはわからない。

考える頭があるならば「心」はきっとあるから。

それならきっと、心は脳ではなくて、他のどこかにあるところだとなんだろ？。

どうでもいいことかな。

罰つて、こわいと思う。

罪やらなんやらって、現実でばれなくたつてカミサマとやらがわかつているらしい。

僕が死んだ理由は単純。人生で、いろいろやりすぎたから。

一寸先は、闇。

いや やりすぎたという表現は少しおかしいかもしない。  
僕がやつたという確信はしかと持つていて、信じたくは、ない。

三寸先は、大きな机と椅子に座る何人かの老人たち。その場所は、スポットライトが当たっているかのように明るい。

僕が手を動かすと、ジャラリ、と手錠から何処に繋がっているのかわからぬ鎖も、一緒に揺れる。

腕には、冷たく重い金属の手錠。

腕に圧迫感を感じて、少し不快な気分になる。  
と、そんな折、不思議な声がこの空間に訪れた。

【静肅に】

凛とした、威圧感のある声が発せられると同じに、ヒソヒソと喋っていた老人たちが静まる。

女か 男か。中性的で、どちらかといえば、女に近いような、そんな気がする。

カン、カンと相槌……というのだったが、その音はその始まりを告げる。

ああ、始まるのか。

裁判。

そう、この場所、空間を動詞を含めた言葉で言い表すなら、「裁判」だ。

裁判官が前方180度に扇のよつにして7人ほど座り、その真中には、先ほど他の老人たちを黙らせた声の主。指し表すなら、この場での最高責任者というところであろうか。その場所だけ、ほか6人と違い、未だ光が当たらず、どんな人物なのかを窺う事が出来ない。普通の裁判と違うのは、弁護側がいないことと、検察側がいないこと、あと、暗いこと。でもたぶん、意見を発する事も許されない。日本国憲法どうした。ワイメールを返せ。

というか、裁判官一人一人が検察でもあるようなものか。何そのワニサイドゲームこわい。

それはそつと、弁護無しなんて酷いと思つ。幾ら金が無いといっても、弁護士ぐらい出してもらつてもいいじゃないか。僕は心の中で小さく怒りの念（？）を発する。

まあ、どうでもいいか。

僕は適当に納得すると、先ほどの声がした方を見やる。

その時、やつとというか、唐突に中心の人物に光が当たった。

パツ、とその姿が露になるまでに、当然ながらCMやカウントダウントなんてものはなくて、唐突で味気ないものだつたけれど、僕は、目を離す事が、出来なくなつた。

それは魅力か。否、最早それは魔力といつても過言ではない。

神々しさ、美しさ、そんな陳腐でチープな言葉では言い表せないほどに、それは凄まじかつた。

中心に現れたのは、他6人などとは格が違う、といつか同じ空気を吸うことさえ許さないといわんばかりに、圧倒的な、そう、女性だった。

僕は自分の目を疑つた。こんな「神秘」が存在するのか。こんなものが存在していいのか。

瞬きすらも許されず、吐息を漏らす事も是とされない。

そんな僕の様子を見ていないのか、その女性は淡白に手に持つた紙を読み上げる。

【被告人には、刑罰が科せられる。被告人「」は正しく、人の一生では補え切れないほどの罪を犯した。そこに酌量の余地はなしと思われ】

女性が僕を見ていないように、僕もなにをいつているのかなど、聞いていなかつた。

唯一つだけの思いが僕の脳内を、濁流の如く駆け巡る。

思いの奔流が、脳の中を完全に巡り終わると同時に、カチリと、何かが繋がつたような気がした。

駄目だ。抑え切れない。抑え切れるはずがない。

そこに理性はなく。そこに知性はない。

或るのはただ、野生のみ。獰猛な狼の如き、狂つた野生のみ。

「心」が、飛んだ。

「体」が、躍動した。

「意識」が、弾けた。

「」が牙を剥いた。

僕が右回りに5度傾いたのを感じた。

自分で、何をしたのか全く理解できなかつた。

気付いた時には、目を白黒させ、現状を理解する事が出来ない女性と、同じく、現状を理解できない僕しか、その場で「心」を動かすものはいなくなっていた。

恐らく、恐らうだが、老人たちは何もわからないまま、その命の灯火を、雪崩の如き濁流に飲まれ消していったのだろう。

僕自身、寸分も理解できない事を、他人の理解に及ぶ道理があるとも思わない。

気付けば、腕には先ほどまであつたずしりとした重みや、ジャラジャラと五月蠅い音はなくなつていて。

どうやつて外したんだろう、そう思つて腕を見れば、人より少しばかり華奢な腕はあられもない方向へとアクセラレイションしていた。ついでに、ポタポタと自分の物ではない血が、滴つていた。

地べたに倒れる老人たちをよく見れば、これまた酷い。

皆々顔が、心臓があるはずだったスペースに空き容量があった。

僕が、やつたのか？

またか。

やはり、抑え切れなかつた。

もう一度、女性の方を見る。

僕の意思とは違う「」が、勝手に言つた。

「結婚しましょう」

場にはまた、静寂が戻つてくる。

そんな時、やつと意識が現状に追いついたのか、僕を見るなり、女性は悲鳴を上げた。

甲高い、女性特有の声。

先ほどまでの、凜とした声は何処へか。先ほどまでの、魅力は何処へか。

ああ、何だ。そつか。そつなつてしまつのか。

その瞬間僕の「」は、興味を失つたらしい。

「」の中で、目の前の女は最早、家畜と同じ位置にまで落ちた。こんなものに魅力を感じてしまった「」は、きっとバカだと自分を嘲笑する。

もういい、こんなもの要らない。

「」がそう思つた矢先、僕の目の前の女の首が、プロのフイギュアスケート選手の技のよう、綺麗に、宙を、飛んだ。手には、先程より少し多く、血がついていた。

僕の瞳からは涙が滴り落ちていた。

「心」「心」を持つパートを失った体は、バタリと音を立てて地べたに倒れ伏した。

僕は地に涙を落しながら、丁度足元に転がってきた首を、躊躇うことなく蹴り飛ばした。

いつものことだ、そう。人を殺せば悲しくなる。僕の意思でなくとも僕はそう納得した。

踵を返し、この部屋の出口ひしき扉の場所へと歩いてゆく。扉は案外、大きかった。

両手開きで、3mはありそうな扉だ。

僕は迷いなくそれを開く。ぐしゃぐしゃになつた両腕の痛みが、少し気になつた。

その先は、白だつた。

だがしかし、そんなだからどうだといつのだ。こんなところからはさつとおさらばしよう。扉の先は見えないが、進まなければ意味はない。道がないなら作らなければ。

きっと「」を変える事は出来ない。

僕はゆっくりと、扉の外へと足を踏み出した。瞬間、世界は右に175度傾いた。

## 第一話（後書き）

夕方6時をお待ちくださいませ。

## 第一話（前書き）

続やで、じれこます。

お楽しみいただければ幸いで御座います。

傾いた世界は、深い、深い、闇に包まれていた。  
どうやら、外には出ることが出来なかつたらしい。

といつのは、まあ勘だけれど。

さきほどまでぐしゃぐしゃだつた手は、いつの間にか元通り、人よ  
り少し華奢ないつもの物に戻つていた。

適当に、気が乗るままに歩いてみると、川に出た。向こう岸はかろ  
うじて見える。

花畠があつた。綺麗な、朱い花。その花は、どういづ理屈か、死を  
思わせた。

彼岸花　　といづやつかもしれない。

川には、船が浮いていた。木で出来た、お粗末な小船。  
ある意味当然といつては当然だけど、小船の上には一人、黒いフー  
ドつきのコートを着込んだ人が座つていた。

僕は聞いた。　船を出しているんですか？

フードを被つた人は答えた。　ああそうさ。あつちに魂を送り届  
けるのが俺の役目さ。

この人物、男だつたようだ。

なんとなくだけど、僕は向こう岸に行かないといけない気がする。

僕はまた聞いた。　お金はかかりますか？

男は、抑揚のない声で答えた。　ああ、無料じゃない。<sup>タダ</sup>六文だ。  
ないなら服を置いていきな。

どうやらこの船頭の男、男色家らしい。僕だって、死んだとはいえた花も恥らひ思春期の男の子だ。

こんな得体の知れない男に、自分の裸体を見せるわけには行かない。

僕は冷たい目で男を睨む。

お前さん、何か勘違いしてないかい？ 男は呆れながら言つてきた。  
何を？ わけがわからない僕は、男の質問に質問で返した。  
はあ、と船頭はため息を付いて僕に「乗りな」といつてきた。

まさかこの男、船の上で僕をやらかそうとしているのではないか…。  
…。

そんなことを考えて、僕は一步あとずさる。  
んなことするわけねえだろ、と男は少し苛ついた風にして、僕に怒  
鳴つた。

まあいいか、と僕は適当に納得して、小船に乗つた。

やはり、僕は運が悪い。

小船に乗つて数メートル進んだら、船が転覆した。

今度は、左に175度傾いた。

目を開けるとそこは、部屋だった。

どこか、いいお屋敷の執務室か何かを思わせる、しつかりとした、  
いるだけで気を張りそうな造りの部屋だ。

前を向くと、恐らく執務用だろう机に、人が座つていた。

僕の気配に気付いたのだろうか、その人は書類から顔を上げた。

女性だった。綺麗な、とても、ものすごくどう形容していいのかわ

からないほど、綺麗な。

今は見ることが出来ないが、机の下まで続いているであろう、艶を  
持つた赤いロングの頭髪。其れは奇しくも、先ほど見た彼岸花を  
死を思わせた。

それと対比するように、病的なほどではないが、大理石と比べた時、  
大理石が劣ると言わざるを得ないほどの、白磁の如き白い肌。<sup>ネム</sup>合歡  
木、その白が「創造」を思わせた。

瞬間、パチリと目が合つた。

僕は、目が離せなくなつた。

でもだめだ、魅力を感じてはいけない。僕はまた、殺してしまつ。

僕は咄嗟に目を伏せた。

目の前の女性は僕の仕草を気にする風でもなく、気さくな感じで僕  
に問うてきた。

「迷子かな、少年」

その声は、母を感じさせた。僕自身、自分の母など知らないが、そ  
れでも、人間の本能なのか「母」という認識を、その声に持たせら  
れた。

「らしく……です」

臆病な僕は、おどおどと答えた。

「ふむ……なるほどなるほど。」こんなところに迷子で来れるなんて、  
少年はは中々運がいいかもしない。どれ、少し待ってなさい」

運がいい? 冗談は綺麗さだけにしてくれ。僕の運がよかつたら、

世界中、どこをスコップで叩いても水や石油が出てくるだろつさ。  
そんな他愛もない事を考えていると、女性は椅子から立ち上がり、  
僕の方へと歩いてきた。

「僕に……近づかないでください！」

咄嗟に、僕は怒鳴つていた。

「むむ、それはどうしてかな」

「貴女のような人が近づけば、僕は貴女を……殺して……しまつ  
「なるほど……。まあ、いいんじやない？」

そんなことを言つて、その人は僕に近づいてきた。

駄目だ　押さえ切れない…………つ。

僕は俯いた。

ヒュン、と風を切る音。

その後にゴトン、と物が落ちる音がした。  
だから、言つたのに。

僕の目からはまた、涙が滴り落ちた。

そんな僕の耳に、聞こえるはずのない声が聞こえてきた。

「危ない危ない

えつ？　なんていう間抜けな声を出しながら、僕は顔を上げる。  
目の前には、顔を俯ける前にも見た顔が、しっかりと胴体に繋がつ  
て、いた。

「わたしじゃなけりや、死んでいたね。少年はどうして、わたしを  
殺そうとしたのかな？」

くつ、と僕は息を溜め、やつとのことで声をだした。

「駄目……なんです。殺したくないのに……体が勝手に動く。まるで、操られてるみたいに」

「それは興味深い。二重人格？　いや、違う。もっと……そうだね。言つなれば、この行動は少年の「本能」、いや「魂」の持つ形なのがもしけない」

「つまり僕は……本当は人を殺したいと思つてはいるんですか！」

いつの間にか僕は、声を荒げていた。  
こんなに叫んだのは、いつ振りだるつ。

でも、それでも、納得がいかない。

そんな僕に対し、女性は辛らつに告げる。

「やうこじ」とこなつちやうの……かな

嘘だ！  
僕はそう叫びたかった。

でも、だけど、そうすることは出来なかつた。  
まるで、僕の「心」が、「魂」がその通りだ、と肯定するかのよう  
に僕の発言を許さない。  
女性は、言葉を続ける。

「零崎つて知つてゐかな、少年は

知らない、そう口に出したかつたがショックでまだ言葉が喋れない。

「喋れないなら勝手に言つんだけだ。」

わたしはさ、下界のモノが結構好きなのよ。少年、孤児とからしいから知らないかもだけど、所謂サブカルチャーってやつ

「何で僕の事をしつっているんだ。

そんな疑問が頭をよぎる。あと、サブカルチャーは知らないわけではない。とはいっても、少しだけど。

「それで、わたしのお気に入りの本の一つに戯言シリーズっていうのがあるんだけど、それには「零?一賊」っていう殺人集団が登場しているの。物騒よね。

その一族つて、みんな「殺人」をすることに良心の呵責も、ストップもない。ただ人を「殺す」ことを「零崎」とした、集団。少年は言うなれば、出来損ないの零崎。意識を持つて人を殺さず、意識の外で人を殺す。意識してやつより始末が悪いのよね

いつの間にか女性は、近頃の若い女性を彷彿とさせるような喋り方に変わっていた。

僕は饒舌に喋る彼女の言葉を、今はただ聞く。それにしてもこの女性、何故ここまで自分を構うのか。こんな、得たいの知れない自分に。

そして何故だか、今はとても気分が落ち着いている。

「結論を完結に言わせて貰えればね、少年、あなた狂っているの」

瞬間、僕の脳はストップした。

先ほどまでの安心感は消え、何も考える事が出来なくなる。

「星が、悪かったのよ」

星？

女性の言葉に、なんとか脳を動かす。

「ほりょく言ひじやない？ 何とかの星の下に生まれた人間は、どんな運命を辿る、とか。少年は、そのなかでもデンジャラスな星の下に生まれちゃったの」

デンジャラスなんていう俗っぽい言葉を使われるとは思つていなかつた僕は、自分の強張つていた体から少しづつ力が抜けていくのを感じた。

女性は僕から離れ、執務机までまた歩いていく。女性は机の上に、いつの間にか置いてあつた資料を手に取ると、途端に優しい表情を悲しげな表情に変えた。

そんな顔をしたまま、女性はゆっくりと、僕に 近づいてきて、泣き出しそうになりながらも、言葉を紡いだ。

「結局、運が……悪かったのよ」

その言葉を聞いて、僕の中で何かがブツンと音を立てて、切れた。

「運……？ 運つて何だよ！ 僕の人生、運のせいで滅茶苦茶かよ！ 巫山戯んなよ！ 運が悪くて、星が悪くて……それで俺の人生バツドンドカよ！ なんで……だよ……」

自分でもわかつていた。運が悪いという事自体。今まで「僕は運が悪い」って自分の中で無理やり納得してきたけれど、今、ついに溜めていたものが溢れ出してしまった。

情けない事も自分で理解できているし、それが八つ当たりだといふことも、頭のどこか冷静なところで分つてしまつている。

「「」めんなさい……」

女性は何故か僕に謝った。

何で？ どうして？ 僕が悪いのに。

「何で……何で貴女が、謝るんですか？」

「私がいけないの……私が、いなければ、こんなことには……少年はこんなところに」なくてよかつたのに」

え？

「さつさ、ちょっと待つて、つていったでしょ？ アレね、少年のこと調べてたの。調べて、それでわかつてしまつた。少年の、強制的に背負わされてしまつた、咎を」

神様というものは、世界中に存在するあらゆる物を、一つ一つ情報をまとめ、書類化しているらしい。

この女性は、突然の迷子である僕に興味をもつたそうだ。

調べて、わかつた答え。

僕が、何故ここにきたのか、その理由。

僕が咎を背負う羽目になつた、その所以。

「少年の生まれた運命の星、それは私を示す星。破壊と創造。明けは創造、宵は破壊。その中間は、わからない。少年が生まれたのは、何が起こるかわからないパンドラの時間。中に入っているのは災厄か、はたまた平和か。残念……いえ、不幸中の幸いというのかしら、少年が貰つたものは、両方。平和を希求し、その中で破壊を振りまく。そう、少年の星は

シヴァア。

続けられたのは、鳥のさえやきの様な小さな咳きだつたが、僕の耳には、確かに届いてしまつた。

「「めんなさー……」

女性 ヒンドゥー教の破壊神シヴァ は、懺悔の様に、小さく肩を震わせながらもう一度、そう呟いた。

僕の田元からは知らず、涙が溢れ出していた。

「でも……あなたのせいじゃ、ない」

涙が出るのを無理やり無視し、そつとだけ言って、僕はこの莊厳な部屋の入り口に向かつて歩き出す。

「 ヒンドゥーの行くの

シヴァは僕に問うてくる。

僕は、先ほどのシヴァの懺悔の声の様に小さく呟く。  
「どこか。僕は行かないと。何かしていないと、僕はおかしくなってしまうから

それは偽る事のない本心だ。

この場を離れて、何かしていないと今にも心の中の何かが瓦解して、壊れたダムに押し寄せる水の様に、何もかもを飲み込んでしまう、そんな気がしたから。

「そつ……。なら、これあげる

シヴァは何もないはずの空間に手を突っ込み、何かを取り出すと、

僕の方に放つて来た。

シヴァが僕に投げ渡してきたのは、細長い棒状のモノが入った袋だつた。

「これは？」

なんの気なく、僕は簡潔に聞いた。

あっちに言つたらあけて、そつとだけ言つてシヴァは机の椅子へと戻つていぐ。

僕はまた簡潔にありがとう、とだけいつて扉へと歩いてゆく。

扉はまあ、普通のもので身長は2mもなければ屈んだりなどする必要はなさそうな、一般家庭にもあるようなものだった。

「さよなら」と僕は、既に机で書類と向き合つてゐるシヴァへと呼びかける。

するとシヴァは書類の方を向きながらも、「さよなら」と返してくれた。

扉を開けてみるも、そこには何もなかつた。

なんだ、と拍子抜けしたわけではないが、特に何もなかつたことド安心するわけでもない。

僕は迷うことなく、何もないとこへと、足を突っ込んだ。

本日三回目の、感覚。

世界は、今度は36.5度ほどずれた。

僕の意識が消える瞬間、シヴァの声が聞こえた気がした。

聞き間違いでもなければきっと彼女は、こいついたと思つ。

頑張つてね、私の息子。

僕は心の中だけでも、答えた。  
ありがとう 母さん。

僕は意外と、母性に甘えるタイプだったようだ。  
そして僕の意識は、完全に焼き消えた。

next A.M. 0 o'clock

## 第三話（前書き）

今日はもう少しあ。

楽しんでいただければ恐悦至極で御座います。

田を開いて最初に理解できた色は、白。ただ、それは氣を失う前に見たような全てを覆い尽くすような白じやなくて、やさしい綿のような白だ。

どうやら、今度はちゃんと現実にござつたらしー。

それにしても、だ。

ここは?

ここは、そう。

「何処だ?」

「おや、田が覚めましたか、お召さま」

流暢な、訛を感じさせないお手本のよつな英語だ。

そんな声がした方を見れば、何処かで見た顔。つい最近、それも1時間以内に見たような気がする。

ああ、そうだ。思い出した。あの女性に、シヴァー、よく似ている。瓜二つ。いや、これほどの美貌を持つ女性たちを、瓜などにあてはめていいわけがない。言つなれば、華だ。「花」ではなく、より美しさを強調した、「華」。

違うのは髪の色だ。朱ではなく、とても……とても綺麗な、純正の「金」も眩むほどの金髪。

その女性は優しい、母 シヴァ を幻視させるよつな田で、僕を見ていた。

そんな真つ直ぐな田に、頬が赤みを帯びてしまつを感じて、咄嗟に顔を伏せてしまつ。

「……は、何処でしようか

「……はしがない貴族の屋敷です」

俯きながら僕が昔身に着けた、ちょっと洋服ではない英語でそんなことを聞くと、女性はまた、綺麗な声でそう答えてくれた。

やつと気付いたけれど、どうやら僕はベッドに寝かされているらしい。生前 といっても、僕にとって何時が生前で生後なのかは曖昧だから、今の状況をどう定義していいのかわからない 感じたことのないような暖かさと柔らかさから、高い物なのだろうということがわかる。

貴族の屋敷だといつていたし、見たことは無いが高価なものもたくさんあるのだろう。

ふと、手元に違和感を感じ、高価そうな毛布の中から腕を出す。腕には、シヴァに貰つた物をしっかりと握つていた。

「ああ、ですか。あなたを寝かそうとした時にどうかと思ったんですけど、どうにも手から離れなくて。まるで、形見か何かの様に握つていらっしゃって。ふふつ」

女性はそういって小さく笑つた。見ていくとも、その様子が簡単にそうぞうぞうできてしまい、また少し体温が上がつたのを感じた。それにも、気絶しながらも離そうとしなかったのか、僕は。形見か。云い得て妙だが、ある意味、それに近いものかもしれない。

そんなことを考えてみると、コンコンと、ドアをノックする音。誰かがドアの前にいるのであらうということはわかつたが、それ以外に僕は「違和感」を感じた。

「気配」がなかつた。

この部屋の前まで歩いてくる音さえもせず、ノックという行動を起

こすその時まで気配を感じることが出来なかつた。

これでも、少しあは いや、少しじゃ ないか。

別に自慢したり誇つたりしたいわけではないけれど、というか寧ろ自分としては嫌なくらいだけど、僕は生来そういうことには敏感だ。

女性はそんな僕のふうには気付いていないようで、先ほどまでと同じ優しい声で「どうぞ」とだけ言うと、扉が開き男が一人室内に入ってきた。

背の程は180くらいだろうか、少し細身であるう体躯からは、大きさを多大に感じさせるも、威圧感や迫力といったものは感じさせない。消しているだけ、なのかも知れないが。

ピシッと伸ばした背筋に、黒い一昔前を思わせる執事服。その上に乗る顔からは優しい雰囲気が漂い、その双眸をレンズ越しに覗かせる眼鏡からは愛嬌さえも感じることが出来る。

だが、僕が見るのはそこではない。

見ただけで、わかつた。

僕の「本能」が頭の中だけたましい警鐘を鳴らす。

こいつは 本物だ。

ぞくぞくと、「本能」が僕の体を蝕んでいくとしているのが、感覚でわかる。

落ち着け。落ち着け。と心の中で念じるように口<sup>ひたすら</sup>に繰り返す。

「奥様、お嬢様がお帰りに おや、田を覚まされましたか、御客人」

男は気のよさそうな笑みを浮かべているが 違う。この笑みは作り物だ。

見る人、分かる人が見れば、一目で感じることの出来る「違和感」。

たたず  
併まい、距離の取り方、どれもこれもわざとらしいほどに完璧。精巧に作りこまれた「偽者」だった。

確實に、時間とともに「本能」が侵食していく。が、その変化は一向に訪れない。

何でだろう。

侵食が完了する直前までは確實に進んでいるはずなのに、その先…つまり、体の主導権が何時まで経つても奪われない。

「ええ、今お起きになつたところとして。それでガエターノさん、娘が帰つてきたそうですね」

「はい。もうすぐ此処へいらっしゃると思ひますよ。御客人のことが大層気になつていらしたようでおつと」

男 ガエターノと呼ばれた人物が言葉を言い切る前に、その脇から、金色のヤギが いや、見間違えだつた。飛び出してきたのは、少女だつた。

僕の隣にいるおつとりとした女性をそのまま幼くした様な、可憐な金髪の少女。恐らく、母子だろう。

僕の「心」がドキリ、と跳ねた。

シヴァや、目の前の女性に感じたものとは少し違う、初めての感覚。どうしてか、その初心な感覚は僕の「本能」を宥める様にして落ち着かせてくれた。安心感、それが「心」を満たす。

子どもといふのは、人の心の動きに敏感だということを聞いたことがある。

そんな僕の様子に気がついたのか、いつの間にか僕の寝るベッドの上に乗り覗き込むように、心配するような顔で僕を見ていた。

「……、エヴァンジエリン。お客様はまだ起きたばかりなのよ」「はは……大丈夫ですよ。子どもは、好きですか」「「うちの子がすいません」

厭くまで、「表で出でている僕」は、だが。

エヴァンジエリンと名を呼ばれた少女は、ちょうど僕の膝の上辺りにちょこんと、両足で僕の膝を挟み込むようにして座つている。

その眼は、まだ僕の目を真つ直ぐに見つめていた。

「お客様はそう言つてらつしゃるけど、エヴァンジエリン、いい子だから降りなさい」

「だつてね、お母様。この人、とっても寂しそうな目をしてる」

「」

子どもは、鋭い。人があまり知られたくないことを、過敏に感じ取る。

それを、遠慮なく、堂々と、口に出してくれる。

「大丈夫……です。エヴァンジエリンちゃん だつたかな、いいよ。そこにいて」

「本当? ありがとつー」

子どもらしく、純真無垢な満面の笑み。その笑顔にまた、ドキンとする。

「それでは少し、お話をしましようか。貴方がここに来た経緯は、記憶におありでしょうか」「

「いえ。……何も」

「でしょうね。貴方はそここの森でその子……エヴァンジエリンが、お倒れになつているところを見つけました」

女性が指差す方を見ると、小洒落た窓の向いへ、鬱蒼と生い茂る森が見えた。夜道を一人で歩けば、何か見えてしまうんじゃないかと思つような、おどおどしい雰囲気を持つた森。

どうやら僕は扉をくぐつた後、あの森の中にでたようだ。

女性は説明を続ける。

「娘が走つて私のところにきたときには驚きました。とつても忙しい様子でいうんですよ。森に生き倒れがいる、早くしないと死んじやうつて。この子はいつも落ち着きがないんですけど……その時は特に。私もこれは一大事だと思いまして、息せき切つて走つていつたんですよ。そのガエターノさんと一緒に」

「私も驚きました。お嬢様が私と奥様の服の裾を力いっぱい引っ張られて」

男のしみじみと語る風は同情を誘わせるが、僕は警戒を解かない。この手のタイプは警戒しすぎても警戒しなさ過ぎてもいけない。丁度いい程度に注意しておかなければ、足元をすくわれる。

「娘に引かれるままに進んでいけばまあ、驚きました。まるで死んでいるかのよう人が氣絶しているじゃありませんか。大急ぎでこの屋敷までガエターノさんに運んでもらいました。此処に来るころには貴方はもう真っ青で、血が通つていなかのようで心配したのですが……見たところ、大事なさそうでよかったです……」

女性は目を覚ました時に見たのと同じ、優しい、母を感じさせる笑顔を向けたきた。

「ああ、そういうえば名前をお教えしていませんでしたね。私の名前はテエス・N・D・マクダウェル。娘はエヴァンジエリン、そして

我が家で執事をやつてくださつているガエターノ・ヴァレッティさん。それで 貴方のお名前を、お聞かせいただいても？」

名前。名前には力が宿るという。いや、「縛り」に近いものか。名前はそれ自体にその「名」を持つモノを縛る力を持つている。その人の人となりや人生を決める最初の何割かは、それによつて決まると言つても過言ではない。

ならば僕の生前の名前は何だつたか。記憶を探ろうにも、出てこない。思い出せない。いや、思い出したくないだけなのかもしれない。自分で自分の記憶に鍵をかけて心の奥底にしまつてしまつたんだどうと、適当な当たりをつける。

では 今世ではどうじょうか。  
自分で決めるべき、なんだらつ。誰も僕の名前を決める事の出来る人はこの場にはいない。  
ならば、そうする他ない。

そんなことを考えていると、ふと、一つ思いついた。  
まるで元から決めていた いや、決まつていたかのように、口から出ていた。

「…………優織、  
…………ゆうしき  
哀川優織あいかわゆうじきといいます」

僕は、僕の運命は 僕を変えることが出来るのであらうか。  
この柵じがりまから解き放つてくれるのだろうか。  
どうなるかわからないけど、僕は……前に進むしか、ないのだ  
らう。

そして、僕の奇怪で奇妙な第一生が始まつたようだ。

## 第三話（後書き）

少し短いですね。

next . P , M  
6  
o - c l o c k

## 第四話（前書き）

夕方です。

楽しんでいただけるかなあ。

この光景を一言で表現しようとすることは、きっと、叶わない。

一面に広がる森の中でひときわ目を引く、切り立った崖の上、女はその真紅の髪を靡かせる。真紅の中に、稻妻を思わせる黄色のメッシュの様なものが目を引く、前衛的な髪型。

目を引くのはその特徴的な髪型だけではない。髪色に合わせるような、真赤なワインレッドのスース。

そして、あまりにも常人とかけ離れた……圧倒的なプロポーション。ただ……田つきは、異様に悪かつたが。

知る人は知る。

知らぬものは、裏の社会では行きぬくことは難しい。裏社会において情報とは、己が運命を最も左右するからだ。

人はこの女のことを、こつ、言つ。否、「ひー」ではなく「これら」の名で言つ。

『人類最強の請負人』、『赤き征裁』、『死色の真紅』、『疾風怒濤』、『一騎当千』、『赤笑虎』、『仙人殺し』、『砂漠の鷹』、『嵐の前の暴風雨』

そして

『人類最強』、と。

知らぬ一般人が見れば、こいつのだろう。

「美しい」、と。

ただ、この女の本質をある程度理解している少年

いーちゃんと

呼ばれる少年は、露ほどにもそんなことは思わないのだろう。  
そんなことを考え、女は苦笑する。

ふと、女は此処に来た経緯を思い出した。

それは唐突だつたが、いつものことだった。

依頼、女の元に訪れたのは一つの依頼だつた。

「少しばかり、息子を助けてやつて欲しい」、要約するとこういった内容だった。

内容を理解した直後はそれこそ、興味を持つ事は愚か、やろうなどとは考えなかつた。 が、

興味が湧いたのは、唐突だつた。

女のところに、一人、訪ねてきた。 それこそ自分で見惚れてしまふくらいの、絶世の美女が。

話を聞けば、件の依頼を出した人物だそうだ。

そこで女は気付く。何故今まで不思議と思わなかつたのか、「不思議」だと思つくらいに、不思議なことであつた。

女は長期間特定した住処すみかを、基本的に持つことはない。依頼を出すには、会いに行くしか方法はないはずだ。

それがどういうことが、この目麗しい女に会つのは、初めてだ。

ならば如何してどうやつて如何様にして、依頼は女の下に無事届く事が出来たのか。

変装？ そんなものもわからない自分でない。

他人に行かせた？ 自分のところに「いーちゃん」以外がいるのは随分と久しぶりなはずだ。

女は俄然興味が湧いた。自分の、理解の及ばない場所。

『人類最強』の名は伊達ではない。

自分 人類が理解できない場所に位置する存在など、ある程度絞られる。

そしてこの美貌だ。推理小説は嫌いだが、女は自分の勘には自身がある。一応だが、『探偵』の肩書きも持つてはいた。

十中八九、この女性は神、或いは、それに準じたモノであろう、いや、きっと神だ。女は自分の「勘」を信じた。

案の定、というより、当然の結果だったといつべきか。

女性は何のけなく、暴露したのだった。「自分は、神をやらせていただいています」なんて風に。

それには流石の『人類最強』も田を丸く、はしなかつたのだが、それでも、大層驚いた。

神というのは、随分と気楽なんだな……だなんて考えるくらいには落ち着いていたわけだが。

女性本人から聞かされた内容は、先に聞いていたものと大差はなかった。

何故わざわざ出向いてきたんだと聞けば、優しいお釈迦様のような笑顔で「私がこなれば、きっと貴女は依頼を受けてくれなかつたでしようから」と。

お見通しか、と心の中で舌を1寸ほど巻いた。

女は依頼を受ける事にした。理由は簡単。興味を持った、いや、少し違う。「匂い」がしたからだ。

それも、自分の一等好きな、陳腐だけど爽快な物語が起こる「匂い」<sup>スヌーリー</sup>が。

見てみたいとも思った。

それほど長い期間とはいえないが、自分が師事し、生き方を教える人間がどれほど成長せしめるかを。

そこまでで、女は考えるのをやめた。

これではまるで自分が年を取ってしまった様ではないか、なんてことを思ったからだ。

いや、そもそもその思考にいたること自体が年寄りくさい  
つて、泥沼じやねえか。

女は内心で自分に突っ込む。

少し時は立ち、女は落ち着いたのか、スポーツ選手の様に、といつ  
よりは、喧嘩前にやるような首を回したりといった 準備運動、  
らしきものを始める。

最後に大きく伸びをすると、女は何の気なしに 墓から飛んだ、  
飛び降りた。何の躊躇いも見せず。

これを見ていた人間がいたら両手で顔を塞いだかもしない。  
だが、女は大した事無いとばかりに、腕も何も動かさず、ただ地球  
の重力に従つて自由落下を続ける。

真赤な髪と、真赤なスーツが引き立ち、さながら、その落ちていく  
姿は真赤な龍を思わせた。

正に地面にぶつかる、その直前、女は見事に空中で一回転を決める  
と、スタリと立つた。

あまりに呆気なく、当然とばかりに、スタリと。

「 さあて、行くか」 そんな呴きは、森の木の一つに反射して、  
その場所に帰つてくるときには、女の姿はそこになかった。

この女、名を  
哀川、潤。

人は彼女を

『人類最強』と、呼ぶ。

目を開いて最初に写るのは、最早いつも事となつた、豪奢なシャン

デリアだ。

「この家に身を置いて、数年が経つた。

保護してもらつたその日、僕は考え込んだ。

なんといっても、行くところもなければ、この世界の事もからきしわからぬ。

出来れば、安定した宿と、食べ物が欲しかつたが、そつそう見つかるとも思つていない。

とはいつても、いつまでも世話になるわけにはいかない。  
その日一日だけ泊まらせてもらい、宛てもなく出て行く氣だったのだ、が。

嬉しい誤算だつた。

この屋敷の事実上の家主である、デエス・エ・ド・マクダウェル。  
彼女はこの家に住まないか、と、そう僕にいつてきた。

当たり前ながら、僕は最初断つた。

稼ぎ口も、何も、何もかも、僕は持つていない。

そんな人間、邪魔以外の何者でもないだらう。

だから断つたのだが。

どうにも、エヴァンジエリンちゃんは、僕に懐いてしまつたらしい。  
考えている間も、僕の寝かさせて貰つてているベッドの上で僕の事を  
ずっと見つめていた。

これでは、断固として断る事が出来ない。それほどの威力<sup>も</sup>なのだ、  
子どもの無垢な笑顔というやつは。

そんあわけで、なし崩し的に僕はこの屋敷にお世話になる事になつた。

もちろん、ただ飯などは僕の感性では到底許容できるなかつたので、  
無理を言って屋敷の雑事を手伝わせてもらつていた。  
とはいつても、それだけが理由というわけではない。

何故か、気にかかるのだ。

執事をやっているという男　ガエターノは、何処か信用ならない。この男が近い未来、何かするのではないか　いや、する。絶対にする。

少しばかり癪はあるが……「　」は、役に立つ。やはり、果てしなく、とてもなく癪はあるのだが。

数年間の間、隙を見せれば「　」のままに殺してしまおうと、そう思っていたが、やはりというか、隙がない。

それに、例え隙を見せて「　」に全てを委ねても、何故か自信がもてない。自信など、持ちたくもないが。

もし仮に、殺すことが出来たとしても、「その後」だ。

当然ながら、今の僕に「　」を解き放つて、それを飼い慣らすことなど、できないだろう。

そうすればどうなるか。……単純な事だ。あの一人も確実に巻き込み　殺してしまう。

そんな風なことを考えていると、やはり時間は待ってくれないというのがしみじみとわかる。早、3年だ。

でも何故か、この3年間、一度も「　」が表に出ようとほじてこなかつた。

シヴァに貰ったアレか……それとも、あの子のお陰か、それは僕にも、ましてやあの子にもわからないだろう。

3年経つた今でも、相変わらずデエスさんは優しい笑顔でゆつたりと過ごしている。

生活物資は月に一度、ガエターノが買ってきている、らしい。

「らしい」というのは、見たことがないからだ。三年間、約72ヶ月、一度たりとも見たことがない。

僕の疑いは、日に日に強まるばかり。

会つた当初7歳だったエヴァンジエリンちゃんは、今年で二分の一

## 成人の10歳。

今年、といったが、厳密に言ひつと、「今日」だ。

嫌な予感は、さらに現実味を増した。

あまりにも、タイミングがよすぎた。 気がするだけ、ではあるが。

デエスさんに聞いたところによると、今日は月に一度の買い込みの日だそうだ。

この屋敷の立つ森は、やはり広大なようで、一番近いある程度整った町に行くのに、徒步で片道4時間はかかる。僕も一度だけ、いつたことがある。

どうやって一か月分、それも4人分もの荷物を、徒步で持つてきているのか、わからない。

車なんてものはない。

謎は深くなるばかりだ。

そこまで考え、ベッドから上体を起こし、大きく伸びをする。伸びと一緒に、ふさりと髪の毛も持ち上がった。

屋敷の部屋の中でも、二階の一一番右の突き当たりの部屋、僕はそこで寝泊りをさせてもらっていた。

この部屋は昔、デエスさんの夫が書斎として使っていたらしいが、当の管理人たるその人は、僕の来る5年前、謎の病に罹り、帰らぬ人となつたらしい。

この書斎、よっぽど太陽に気に入られているのか、朝日が部屋一面に入つてくる。

お陰で毎日、すつきりと寝起きする事が出来ていた。

足を布団から出ようとすると、少し重みを感じた。またか、と思い布団を捲ると案の定、そこには金色の少女がスヤスヤと寝息を立てて眠つていた。

起こすのも可哀想なので、出来るだけやさしめに頭を撫でると、少女はううん、と小さく声を出してまた寝息を立て始めた。

ゆっくりと、起きたなにように布団から足を出し、立ち上がる。もつ一度伸びをすると、後ろ髪からぴょこりと跳ねた一房が頬を擦った。

寝る前にもう少し乾かせばよかつたか、なんて、今更遅い、か。とりあえず顔を洗つて髪を梳かしにと、忘れるところだった。

僕はベッドの横に立てかけてある、シヴァに貰ったアレを掴む。シヴァに貰ったこの謎の物体だが、3年経つた今でも云ともすとも言わない。

どこのか、袋から出すことも出来ない。

この袋、一体どういう仕掛けになつていいのかと思つて、中身の出るであろう場所を留める紐をみて見ると、謎の文字が編み込まれていた。当然ながら読むことは出来なかつたが。

きっと何かおまじないのようなものだらう、なんていつたつて、神様がくれた物なんだから。

その物を持ちながら、ゆっくりと一階への階段を降りて広間へといくと、既にデエスさんは起きていた。

不思議な人だ。

いつも、僕や誰よりも早く起きて、広間でまつたりと外を見ている。3年間、ずっと、毎日、欠かさず。

やがて僕が起きてきた事に気付いたのか、こちらを向いた。

「おはようございます、優穂さん」  
「ええ、おはよう御座います。デエスさん」

いつもと同じように朝の挨拶を交わす。

ふとみれば、おかしなことに、デエスさんはいつまでも僕の方を見ている。

いつもは挨拶をして一回と笑つたあと、またすぐ正面を外に向か

てしまつたが、今日は違つた。

3年間、曲がりなりにも一緒に暮らしてきて、初めて、といつのは些か違和感を感じずにはいられなかつた。

「どうかなさつたんですか、デエスさん」

「あ、いや。どうしてかしら、今日の優織さん　いえ、なんでも……ありませんでした」

おかしな人だ。「オカシイ」という意味ではなくて、変な、という意味で。

「……そづ、ですか。では、僕はこれで」

「はい、今日も一日よろしくお願ひします。　ああ、そつそづ。今日の夜はエヴァンジエリンの誕生パーティをしますから。ふふつ。といつても、4人ですが  
「ええ、わかつています。それでは、今日も一日お仕事させて頂き  
ます」

それだけいつて、僕は顔を洗いに外の噴水に向かつた。

この時に、僕は気付いていればよかつたんだ。

「3年間で初めて」という違和感の正体に。

その日の、オカシさに。

そうすればきっと　あんな事には、ならなかつたんだから

ねぐすと。えーえむひひおくひつへ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2813ba/>

---

魔法先生ネギま！ 哀川優織の躍動世界

2012年1月8日18時53分発行